

序 文

2003年度の研究成果の一つとして、毛利光俊彦君が著した『古代東アジアの金属製容器』を奈良文化財研究所史料第68冊として上梓します。毛利光君はこれまで古代の日本列島と朝鮮半島の交流関係に興味を持ち、古墳時代の金属製冠・金属製容器、歴史時代の瓦塼類などを素材にして調査研究を進め、少なくない研究成果をあげてきました。今回の研究テーマとしてとりあげる金属製容器については、先年行われた法隆寺昭和資材帳に関連する調査研究が導火線になっております。法隆寺には飛鳥時代以来の優れた金属製容器が仏具として使用され、保存の良好な状況で残されており、それに関連する朝鮮半島あるいは中国大陸の関連資料を搜索する段階で知らず知らずのうちに中国漢代にまで遡ったというわけです。この壮大な研究を通じて食器の変遷、食生活の変容、地方色の成立など食文化を基点とする東アジアの文化交流を具体的再現しようとする野心的な試みであります。

今年度はまず中国における歴代の金属容器を観察編年することに主眼をおき、2004年度には母国から出発した金属容器が朝鮮半島、日本列島に舞台にしてどのように華開くかという点を描写することになりますが、研究の始発点になった法隆寺の金属製品に関する研究成果は来年度のお楽しみというところです。

中国における歴代の金属容器を通観する研究は中国においても研究事例が少なく、大胆な視点にたつ研究といえましょう。それだけに少なくない誤解や過ちを秘めている可能性が多々あるやもしれませんが、その点について読者のお許しを願うとともに忌憚のない叱正を賜れば幸いです。

今回の研究及び刊行に際して法隆寺をはじめ、東京国立博物館、奈良国立博物館等の皆様に大変お世話になったことに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2004年 3月

独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所長
町田 章